

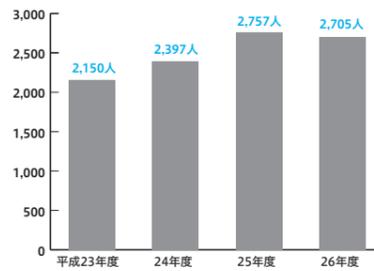


2ページ、3ページの写真ともに、障害者支援施設「第三やすらぎの郷」の利用者が外出して買い物や食事をする際に、サポートをする買物ボランティアと、活動に参加する市内の高校生・小学生（10月7日、14日・駅前町）



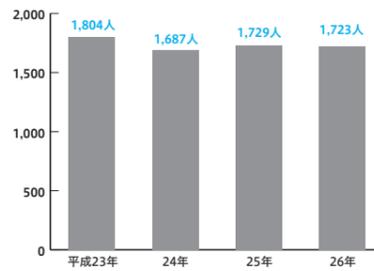
### データで見る社会福祉の今

■小浜市社会福祉協議会への相談件数



※小浜市社会福祉協議会 調べ

■市内の身体障害者手帳の所持者数



※小浜市障がい者福祉計画 より

**日** 本には古くから「結<sup>ゆい</sup>」という言葉があります。田植えや収穫、かぶぶき屋根の吹き替えなどを互いに助け合う仕組みから生まれた言葉です。そこには、報酬や見返りという価値を超えた、「相手のために」、「誰かのために」という、他人を思いやる心から生まれる大きな力があります。それは、日本人が、ずっと昔から身につけてきた相互扶助の「ボランティア精神」と言えます。

一方で、近年、人と人とのつながりが希薄化し、コミュニケーション能力が失われている、という指摘が聞かれます。さまざまな問題を抱えながらも、解決する方法や相談をする相手が見つけれず、生きづらさを感じている人も増えてきていると言います。

人は、一人で生きているわけではありません。家族や友人、職場、地域社会の中で、お互いに関わり、支え合いながら生きています。ボランティア活動とは、自分の家族や友人にするように、「ほかの誰かの気持ちに思いを寄せる」ことから始まります。その思いが育ち、「行動」となったとき、社会を変えることのできる大きな力を生み出します。

人と人との関係性を改めて結び直し、新しいコミュニティを築くため、大きな役割を果たす存在として、今、ボランティア活動に注目が集まっています。

今回、小浜で、重度のハンディを持つ人の外出支援を行っている「買物ボランティア」の活動を追いました。

### 特集シリーズ 小浜の今を追う

## あなたの その手が 温かい

—買物ボランティアがつなぐ「結<sup>ゆい</sup>」—

人は人との関わりの中で生きている—  
福祉はそのような人々の生活の営みを支える役割を担う。  
そして、福祉ボランティアは、地域で生きる人々の切実な思いに触れ、寄り添い、ともに未来へ歩むための道を照らす。  
誰もが、自分らしく生きることができる社会へと続く、光となる。

活動を通して、つながり、結びつく



買物ボランティア 会長  
前田 静江 さん (68 歳・多田)

買物ボランティアの活動を始めて 10 年になります。小学校の給食ボランティアを経て、買物ボランティアに入会しました。市内のスーパーなどで活動している買物ボランティアさんを見て、いつか自分もできるようになればと思っていました。今では、ボランティア活動を通して人とつながり、結びついていくことにやりがいを感じています。

障がいでもうまく話すことができなくても、「たくさん買い物ができるね」などと声をかければニコッと笑ってくださいます。わたしたちの活動で、やすらぎや温もりを感じていただければと思っています。

高校生や小学生の皆さんにも福祉体験として、活動に参加していただいています。これからも皆さんの協力を得て、活動を長く続けていけるよう会員一同願っています。ボランティアの体験希望がありましたら、ぜひご連絡ください。

『買物ボランティア』

昭和 54 年 4 月結成。小浜と若狭町在住の男女 17 人が所属。月 2 回、市内施設に入所する身体障がい者の買物や食事など外出時への介助を行っている。また、施設行事にも参加して、車いすの介助や交流を行っている。近年は、



地元高校生や小学生の福祉体験学習の受け入れも積極的に行っている。平成 27 年 4 月に国の緑綬褒章を受章。

**介助者ではなく、友だちとして**  
18 年前から夫婦で会に参加するようになった松永安司さん。「わたしだって、いずれは誰かに車いすを押ししてもらわなければならぬかもしれない。その分、元気なうちに誰かの役に立てればと思いい活動しています」と、動機を語ります。妻の千弥子さんは、最初、障がいを持つ人とどうコミュニケーションを取ればいいのか分からずに悩んだそうです。「そんなとき、赤尾さんが、友だちと話をするのと同じ感じで接しているのを見たんです。ああ、構えずに友だちになれればいいんだと、気持ちが楽になったのを覚えています。今では、相手の明るさや笑顔に元気をもらおうそうです。

**つながりです、より良い世の中に**  
近年は、福祉体験学習として若狭高校や小浜小学校の生徒も参加するなど、順調に活動を広げられました。5 年前に会に入った松宮さんも大きなやりがいを感じています。「人のために何かをすれば、また誰かが何かを返してくれます。その繰り返しで、人のつながりがを生み、世の中がより良いものになっていくんだと思います」。一方で、メンバーの高齢化という問題にも直面しています。それでも、会長の前田さんは前を向きます。「皆さんのサポートのおかげで今日まで活動してきました。これからも多くの人とつながって、輪を広げていきたいです」。

Group - 買物ボランティア



ステップ 1  
はじめる

踏み出そう 第一歩

活動を始めるのって難しい？いいえ、思いがあれば誰にでもできるんです。

昭

和 54 年から今日にいたるまで、小浜のボランティア団体の先駆けとして活動してきた、「買物ボランティア」の皆さんに話を聞きました。

寄り添い続けて 36 年

「自分の手で買物がしたい」。重度のハンデイを持ち、車いす生活を余儀なくされている施設利用者の声を聞いた社会福祉協議会が参加を呼びかけ、買物ボランティアはスタートしました。

初代会長の赤尾さんは、「ボランティアという言葉も一般的ではなく、障がい者への偏見も根強かったです」と、当時を振り返ります。「売名行為」と心ない非難を浴びることもあったと言います。

同じ創設からのメンバーの寺川さんも、「市内の施設やトイレなど、車いすでは利用しにくいところが多くて大変でした」と、苦勞を話します。

しかし、活動を続けるうちに、次第に認知されるようになり、メンバーも増え始めました。バリアフリーを訴える活動も実を結び、公共施設を中心に、徐々に整備も進んでいきました。

相手の気持ちに寄り添って

わたしも最初は、障がいを持った人にどう接したらいいかわかりませんでした。でも実際に接してみると、仲良くなることができました。これからは、相手の「みんなと同じことをしたい」という気持ちに寄り添い、応えてあげたいです。



まつみや けいこ 松宮 恵子 さん (69 歳・加茂)

わたしたちもうれしくなる

介助をする人の中には、言葉をうまく出せない人もいますが、相手の望むものを買えたときや、一緒に食事をしたときなど、とてもうれしそうな顔をしてくれるんです。それを見てわたしたちも、うれしくなりますね。



まつなが やすし 松永 安司 さん (75 歳)、ちやこ 千弥子 さん (74 歳・雲浜一丁目)

続けられるだけ続けたい

結成当初は 4 人と、人数が少なかったですが、今は仲間が増えてうれしいです。家族の理解もあったから今まで活動することができたと思います。相手に喜んでもらえる、わたしもうれしいので、続けられるだけ続けたいです。



てらかわ ひさこ 寺川 久枝 さん (78 歳・今宮)

みんなの声が元気の源

施設利用者のみならず「ありがとう、待ってるよ」という声をもらうたびに、わたしも元気をもらい、36 年間活動を続けてきました。友だちとして、心を割って、笑顔で話し合えるのが、とてもうれしいですね。



あかお まさこ 赤尾 雅子 さん (78 歳・大手町)



小浜市社会福祉協議会 事務局長  
たなか つねのり  
田中 恒徳 さん (48 歳・金屋)

手をつなぎ、心に寄り添う支援を

インタビュー

買物ボランティアの皆さんのように、いち個人の願いを社会的な願いと捉えて活動することには、とても大きな意義があると思います。支援を必要とする一人一人のことを、地域全体の問題として感じ、「何ができるか」と考えることが、地域福祉の推進、ひいては誰もが安心して暮らせる地域づくりへとつながります。

支援の中でも、「寄り添う」という伴走型の支援が大切だと思います。前でも後ろでもなく。その人の隣で手をつなぎ、心に寄り添う支援が、いま求められています。

社会福祉協議会では、地域の社会福祉を形成するさまざまな団体と連携しながら、人と人、心と心がつながり、交流する「場所づくり」を進めています。

人と「つながり」、輪を「広げて」、関係を「深める」ことで、徐々に地域が良くなると信じています。



買物ボランティア、高校生ボランティアと一緒に買い物を楽しむ柳本さん (10月7日・駅前町)



第三やすらぎの郷  
おおした りょういち  
施設長 山下 良一 さん  
(63 歳・深野)

場に立つて考えることが、より良い社会への第一歩になるのではないでしょうかと、思いを口にします。

「誰もが必ず高齢者となり、人生の途中で障がいを受け入れなければならぬときが来るかもしれません。自分だったらどんな支援をしてほしいか。障がい者や福祉関係者だけでなく、地域のみんなでそういう意識を共有していきたいですね。」

第三やすらぎの郷施設長の山下さんは、買物ボランティアを「家族」のようだと話します。

「外出機会の少ない施設利用者さんにとつて、家族のように寄り添い、支えてくれる買物ボランティアの皆さんは、なくてはならない存在です。」

29歳で福祉の世界へ飛び込み、以来34年間、重度の障がいを持つ人と向き合ってきた山下さん。「同じ地域の中で生活するみんなが、お互いに相手の立



第三やすらぎの郷  
やなぎもと とよつく  
利用者 柳本 豊嗣 さん  
(61 歳)

大事なんです。自分で見て、買ったんだという実感が持てます。」

困っているのは、「行くと、うれしくて買いきすぎてしまうこと」と、笑いながら話してくれました。

温かな人のつながり

手を伸ばすと、手がつながる。心が触れると、心もつながるんだね。

毎

月2回、買物ボランティアがサポートする形で、障害者支援施設「第三やすらぎの郷」利用者の皆さんは、市内スーパーで買物をしたり、飲食店で昼食を楽しんだりしています。10月7日と14日の2日間、現場に密着しました。

自分の意志で買物をしたい

第三やすらぎの郷に入所して4年目の柳本さん。買物や食事に外出できる回数を尋ねると、「施設には50人以上いるので、半年に1回ぐらい」と、教えてくれました。順番が回ってくる日をとて

も楽しみにしていたと言います。

この日は、本や食品のほかに、友人から頼まれていた飲み物も買えました。

「普通だったら当たり前すぎて何も感じないと思う。でも、ぼくたちからすると、外出はとても大切な機会。だから皆さんに付き添いをしてもらえるのが本当にありがたいんです。」

柳本さんは、自分の意志で買物ができることが大切だと話します。

「同じようなものでも、『どれにしようかな』と、自分の意志で買えるのが

みんなが相手の立場に立つて

第三やすらぎの郷施設長の山下さんは、買物ボランティアを「家族」のようだと話します。

「外出機会の少ない施設利用者さんにとつて、家族のように寄り添い、支えてくれる買物ボランティアの皆さんは、なくてはならない存在です。」

29歳で福祉の世界へ飛び込み、以来34年間、重度の障がいを持つ人と向き合ってきた山下さん。「同じ地域の中で生活するみんなが、お互いに相手の立

トピックス TOPICS

買物ボランティアの結成35周年を祝う合唱曲「青空見れば」が昨年完成しました。第三やすらぎの郷利用者の田中克行さん(40歳)が、買物ボランティアとの交流を胸に、歌詞を書きました。

「青空見れば」

きょうはたのしいショッピング  
みんなのかおもにこやかに  
ほしいーものかいえがおさく  
またねのやくそくまちどおしい  
ともにあいるそのもここに  
こころやすらぐこのばーしょ

(歌詞3番を抜粋)



第三やすらぎの郷で合唱曲を初披露(平成26年3月11日)

『小浜市社会福祉協議会』

昭和42年4月に社会福祉法人格を持つ民間団体として設立。「あなたの社協に！」を合い言葉に、生活課題を抱える人への相談や支援、ボランティアのサポート、市内の福祉推進校との連携事業などを職員(パート含む)72人を中心に実施している。

住所：遠敷 84-3-4  
☎ 56・5800



『第三やすらぎの郷』

昭和53年4月に身体障害者療護施設「友愛園」として開所。平成24年4月に「障害者自立支援法」に基づき事業を変更、あわせて施設名称を障害者支援施設「第三やすらぎの郷」に変更。現在の利用者52人。職員(パート含む)37人でサポートをしている。

住所：深谷 10-13-2  
☎ 58・0221



市では、本年3月に「障がい者が住み慣れた地域で、安心して暮らせるまちづくり」を基本理念として、「小浜市障がい者福祉計画」を改訂しました。現在、障がいのある人もない人も互いに支えながら、住み慣れた地域で安心して暮らし、自分らしく自立した生活を送ることができる共生社会の実現のためにさまざまな施策に取り組んでいます。

そのような中、買い物ボランティアや小学生・高校生の皆さんをはじめとしたボランティアの皆さんが、障がい者の社会参加に大きな力となっています。今後は、このような「支え合うつながりの輪」が、さらに大きな輪となるよう、市民の皆さんや関係機関・団体と連携し、協力しながら取り組んでいきます。

「おんがいのひとびとをさあつとまわし」を目標として



小浜市役所社会福祉課  
なかの じゅんこ  
中野 純子 課長 (59歳)

インタビュー



買い物ボランティアの活動に参加する若狭高校1年生(10月7日)と、小浜小学校4年生(10月14日・ともに駅前町)



ステップ3  
ひろがる

地域の中へと広がる

そして、その輪は、広がっていく。どこまでも。

買

物ボランティアでは、活動への受け入れも積極的に推進。今では、市内の高校生や小学生も福祉体験学習として参加するようになりました。

多くの人に体験を伝えたい

10月7日①、初めて活動に参加した若狭高校1年生の田中さんは、多くのことに気が付いたと言います。  
「普段わたしたちが何気なく歩いている道路でも、車いすだと通りにくい段差があるんだと気が付きました」。  
「次に参加するときは自分から話しかけて、もっと楽しんでもらいたいです」と、意欲を口にする田中さん。この体験をほかの人にも伝えたいと話します。  
「一歩踏み出して、やってみないと、コミュニケーションを取る楽しさが分からないと思います。自分の言葉で多く



若狭高校  
1年 田中 優 さん

小

浜小学校では、社会福祉協議会と連携しながら、児童の福祉学習を行っています。今年4年生が1学期に高齢者福祉、2学期に障がい者福祉を学んでおり、10月14日②に22人が買い物ボランティアの活動に参加しました。

楽しく買い物ができるように



小浜小学校  
4年 木越 ミズキ さん

会う前は、障がいを持った人を「かわいそう」と感じていたという木越さん。しかし、買い物ボランティアの体験を通して、「かわいそう」のではなく、「困っているんだ」と、気が付いたそうです。  
「車いすでは、1人で買い物ができないし、エレベーターのないお店では、2階に上がることもできないことに気付きました。楽しく買い物ができるように、



小浜小学校  
4年 河原 稜真 くん

の人にこの体験を伝えたいです。そう話す田中さんの顔は輝いていました。  
**ボランティアを通して生徒も成長**



若狭高校  
教諭 寺本 幸司 さん  
(40歳・高浜町)

「若狭高校定時制課程では柱の一つとして、買い物ボランティアへの参加をはじめ、保育体験やイベントスタッフなど、さまざまな市内のボランティア活動に取り組んでいます」と、若狭高校教諭の寺本先生は話します。  
「生徒たちは、最初は戸惑いも見せませんが、活動する中で、相手からお礼を言ってもらうことが、やりがいになっていくようです」。

「ボランティアを通して地域社会への貢献はもちろん、市民の皆さんと交流し、輪が広がるのが、生徒が卒業した後、地域で生きていくときにも役立つと思います」と、期待を込めました。

話しかけながら、お手伝いをしました。同じく参加した河原くんは、車いすを押していて、「曲がるときに、思った以上に力が要りました」と、活動の大変さを実感しました。  
大変さの中にもやりがいを見つけたそう、「家の周りでも、身体の不自由な人がいたらお手伝いしたいです」と、笑顔で話してくれました。

人並みの幸せをもたらしてくれた

生後半年で病気にかかり、その後、一歩も歩けなくなつたという施設利用者の小堂さん。この日の買物終了後に、買い物ボランティアの皆さんと子どもたちを前に、「36年間もの長い年月、買い物ボランティアの皆さんの助けがなかったら、わたしたちに人並みの幸せがもたらされることはなかったです」、「皆さんの尊い行いは、常に弱い立場の者を案じてくださるもので、心より深く感謝しています」と、感謝の気持ちを伝えました。



第三やすらぎの郷  
利用者 小堂 博文 さん  
(86歳)

誰もが自然と手を伸ばせる社会に

人間は、身近にハンディのある人がいて、接することで、初めて何に困っているかを知り、障がいや要介護、要支援への理解が深まります。

一方で、障がいを持つ人は気軽に外出などできず、閉じ込めりがちなのが現実です。そんな中で、障がい者の外出を後押しして、ごく普通に生活できるような社会を推進する「買物ボランティア」が地域で果たす役割は大きいと思います。

地域を良くしていくには、そこに住む住民のパワーが必要不可欠です。地域の中にある課題を住民

自らが感じて、考えていけるような仕組みづくりこそが今後の行政が担うべきところでしょう。住民、行政、社会福祉協議会が手を取り合い、協力・協働することでより良い地域社会へと発展していきます。

これまでは、当事者も「助けて」と声を出しにくかった。それが言えない、言わせない社会は利己的な社会ではないでしょうか。目の前に困っている人がいて、手を伸ばせば助けられる。そんなときに、誰もが自然と手を伸ばせる社会が一番すばらしいと思います。



立教大学 コミュニティ福祉学部 社会福祉学科  
教授 **芝田 英昭** さん (58歳・埼玉県)  
敦賀市出身。立命館大学産業社会学部教授を経て平成21年より現職。専門は社会保障論。

より良い社会を目指して

これからの地域を作るのは、わたしたちの心と行動です。

ステップ4  
これから

INTERVIEW  
インタビュー

多くの人と手を取り合って活動を

小浜のボランティア活動は、買物ボランティアをはじめとした福祉関係の団体が先駆的な存在として、引っ張ってききました。その後、まちづくり系のボランティアが増えてきて、現在はさまざまなジャンルの団体が活動をしています。

以前は、ボランティアといえば無料のお手伝いのようなイメージを持たれていました。しかし、最近では、個々に目的意識を持って活動していることが広く認識されるようになってきました

今後は、さらにステップアップ

して、行政や事業者との協働の担い手として、地域のニーズに応え、課題解決に向けて取り組めるようになっていくと思います。

そのためには、各団体が自分たちだけでやるのではなく、幅広く色々な人たちが手を取り合って活動することが大切だと思います。小浜には、立場の違う人同士でもみんな協力し合える風土があります。形にこだわらずに、新しいことに挑戦して、活動を広げていくと、組織も地域もさらに活性化していくのではないのでしょうか。



NPO法人WACおばま  
代表 **鳥居 直也** さん (54歳・雲浜一丁目)  
平成16年にWACおばまを設立。ボランティア団体の中間支援やまちづくりに取り組む。

誰もが自分らしく暮らせる社会を目指して

誰もが自分らしく、生き生きと暮らせる社会。それを願わない人は誰もいません。

しかし、現実の社会がそうなるためには、多くのハードルが存在するのも事実です。

ボランティア活動とは、それらの出来事に立ち向かい、地域で暮らす誰もが幸せになるためのまちづくりの手段だといえます。

誰もが、本格的なボランティア活動をできるわけではありません。ただし、自分の身の回りで少し困っている人に手を差し伸べること、ちょっとだけ声をあげてみることで、活動する人を応援すること。あなたの、ほんの少しの歩が、地域にとつての大きな一歩となります。

わたしたち一人一人が、自分のできることから取り組み、支え合い、助け合うことが、より良い社会の実現へとつながっていきます。

【参考文献】

「新・社会福祉とは何か」 大久保秀子・著/中央法規出版  
「福祉ボランティア論」  
三本松政之、朝倉美江・編/有斐閣アルマ  
「よくわかる障害者福祉」 小澤温・編/ミネルヴァ書房  
「人が集まるボランティア組織をどうつくるか」  
長沼豊・著/ミネルヴァ書房  
「お互い様のボランティア」  
マリ・クリスティーヌ・著/ユック舎  
「欲望としての他者救済」 金泰明・著/ NHKブックス  
「弱者はもう救われないのか」 香山リカ・著/幻冬舎  
「さらさらさん」 大野更紗・著/ポプラ社

- 【買物ボランティアに参加する】  
小浜市社会福祉協議会には、買物ボランティアをはじめ、病院ボランティアや点字サークル、手話サークルなど15の団体が登録しています  
興味のある人は、社会福祉協議会 ☎ 56・5800まで
- 【まちづくり活動に参加する】  
小浜市ボランティア・市民活動交流センターには、文化や芸術、スポーツなど27の団体が登録し、まちづくり活動を行っています。  
興味のある人は、市ボランティア市民活動交流センター ☎ 52・7837まで
- 【寄付をする】  
市役所、共同募金委員会(サン・サンホーム小浜内)、市内協力店などに赤い羽根の募金箱を設置しています。街頭募金や区を通じた戸別募金など行っていますので、皆さんのご協力をお願いします。